



中村俊定文庫
文庫 18
23





宗祇老人今年は病にまはるを世中のいふまゝに
 人あもてをり終はるむ世のやあく世のいふまゝに
 書つたけ祇公一捧多ねえ祇公くありて一捧
 くらしくもねえとてをりてをりてをりてをりて
 老人のむねよねえ一捧多ねえとてをりてをりて
 連歌乃奥義は是れ也とてをりてをりてをりて
 法也との卯さ月さ月の十日とてをりてをりて

宗長判



連歌兩枚記

一 前句付句引合まれば公いひつゝそ付句斗引放せば
公別よあふ句あり

よれくねもや花のよく陰かげ

右前句よ引合新ひこ一白の白よああ月と
神よやうてんさるるる

月のかつゝをたれぬうかすは
色深き秋のおもをちり神よおて

引合て月のほろののおもふ神よおておぬり乃
か所記さう一白いさやれたおもちり神よあきさるる心
け屋まなういさやうつゝむ

云かゝ尾上の空を踏かて

引合ていさ山の空を踏かていさゆんいさゆんいさ
あり一白山海の色を踏かていさあり

出さしとんまきはうつゝ舟舟

仲中の小島より海士の歌はうそ

引合て沖の小島よあまの歌はうそその歌より出さ舟を
んれの家はうそとあまの舟ありと付さし一白小島
よも歌のありさるるをあり

吹風より戸浪の神よりあて

あゝふ神乃あまのよか

引合て沖の歌はあて沖の歌はあまの歌はあまの歌は
とみらのちゝあまあり一白の沖の形をありさるるをあり

よりとけりそつらいたづねちり

一 前句の人のつらさを禽獣草木のよきとせらるるなり

をあれくくや 古人の秋

秋風いけよりけり初らん

をあれくくまいはりうの中

おこひぬそふあまきこの夜も

とよのふきくしゆ おく山

麻をふくまのそふ地まや明ぬん

これの世や人よあそいをつまはらん

花のこやこ乃 江の松く勢

さんくぬらういりくくん

さるのなくまも花のそくま

一 禽獣と人の上りそつらあせらるる

さくぬもふくくさるのたふれ

そこさるとわじの花よまをいそ

田原麻の原乃 一 昔に山車

あつのもちと古に都りあををて

さるいあそいひりぬととと

さるいあそいひりぬととと

一 多ふ於葉の文字をてけらるる

さるさるさるさるハ少解たり

雪埋む深谷の小河春さるて

名おけりハ山越て

味つらめさるさる乃

此のひかりの秋のまじり
 今宵月夜は多岐一訓ぬん
 んのいおをいそねまきうき
 夢てのい人いさかしてうき
 人いむりーのまのまもりー
 水あして夢いふうう乃橋柱
 夢いあういいそねとこも
 志すいあういそねをねね
 あういねねいさかしてうき
 明ぬまの雲のま山眉よ似
 雲あうい風い月い出
 秋あぬい月まで人のまきうき

一 前白のやの字に付やうなり
 一 前白のやの字に付やうなり
 海士小舟ひらうらなして出るは
 丁のまきうきもいさかしてうき
 色うきうき秋のま山乃夕日
 一 付白の又文字あうのやうまきうきも一白のかうきに
 到るあり

とつとつあ乃まけていやも
 あまにまの何まの捨小舟
 木のまあうきい山河の末
 胃麻あういあうのましは秋まで
 夢あういあういあういあうの色

旅子何程の遠るをわらして

一 前句をもうい合せて付やうあり

あを杉のころも 樺木の影

大山路の去るの影も遠く花よえて

花のほろほろもさびしき旅路

あういちうきこころいひのそと

のころてそと衣いまさら雲の花

あうあうの 有りぬ 乃月

柱てそ竹の陰よりほろあう

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

一 前句は他人のうらみと我々のうらみとをうらみとせざるあり

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

一 いづくをわかれにをを付さるあり

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

あうあうに少句のあまの山

一山打よみを付水邊山打を付て京をまるとりたる

柳折る川遠の川

山里より入御手門ありて

極子の藤の里の木くさまで

小舟すてそく江に地をぬれ

一前句此末の文字を付句枕細うとる白

福多きうし波風さそく海士舟

福流の川を岩つらひゆく

人よきてちんよからん沖津浪

之田の山乃秋の色く

一付句の中乃七文字を臂とらる白

そこと誰彼の夕ぐれの色

ほろろの若の思ひとつ捨て

うつろ地と屋を成ゆく

あれちり尾をりの上里あそて

一詩の對句のよくとる白

趣より一幸ハハきの云々

沖津浪月の千里小舟おいて

さよの舟をそあそくぬる川

白妙の雲乃を山より輝けて

山陰の月や兔の卦所

秋の夕日や明くすふくちり

一前句よつらるの端的の文を付る白

さしよつとさしよつと清よかきん
花房るはしもふとわらうて
秋公清よかきん秋のささ
北秋よ夕風 雲うくぬ
志のんそや け比の空
小秋夜秋よ風うく夕まき
一さうあはれと云ふふさあはれをけしるる句
さうあはれをねもさうは
めうせいらしと花うわくまて
さうあはれをねもさうは
雲風うわくさううり 詩信下
一前句よつと前句よつとさしよつとさしよつと

田舎をとく人の物をふくし記
産む世の竹一むよさうて
清ういそらんかしむ 山陰
乃の人乃柳あふく梅咲て
一前句よつと前句よつとさしよつとさしよつと
志のんそや け比の空
化人とさうてさうと世の花のさ
二さういんさうしとさうさう
たし月うめて花うくさう
一さうよつとやと云ふと不審さうさうをけしるる句
あまうさう世と人よそつとや
別てさうと清よかきん

世のりつるをねおそりや
花を風つりよりちし初つて
そりや神のそののりも乃道
法をふと志多の内行いへるん
一 するの流まをいふとふあき知かひ多しとけしる
流より 妻のけあそり海
こりれはを庭いさうりのねるも
秋よあををたれよとつま
月をくち 何人あをやまのる
一 付白の末りふをそんでんうる白
んの末りしよのむ夕くま
流もせし恨もせしと云捨て

のこる木の木のえ山風の夢
おとふへきおれい花よりとつま
一 心 碎 くるりまをまをけしる白
霰のむくひいさもあはれ
月のとる抄場のをる乃おゆも
くはるねもくあはまの世や
遠山のをる乃ゆふるなほよまて
一 前白よ京氣二白張まはるいんり付る事あり
流をさかようつる船のねゆり
秋のけをれを行りたしつん
浦くまむふあひのま乃おゆふ
海士もあしつるいこりらあるん

一 系々氣う系々を付くる白あり

た山の麓より衣う川き
杉の葉よりかきこる月がせうわて
輝く川林の里の木々をきして
小船をてそく江にせをまかせ
まはしらすまのまゝの
橋をこむ山かきく秋の
引くはやくく橋を去の
春の秋乃月一節一ふれて
まかりぬやく志がえの幸
秋の秋のふく山に
目もくれあひの

一 白の系々をの白

秋あけに唐地の末富士を
遠山のその秋乃さ
天つし仲こく舟のつふ引て
志くれの流乃やあそ
むのうゆをこの遠山色う
山やねさあをわきうあ
郭公云々の月う結ふ
中庭より雪のたふさし
さの使の花乃う記を
か廉の内乃衣の
朝ちうさ花の白ひり月更て

一 関の系々

すく 吹風の香いり山まで
よりの山花乃古々 暮定^{サハ}て
一 ある何と付ても付な 春をるも ありしに句よこむる
るをと付し なる句

ふらけ ますたハ ぼろり ちり
あひは乃ふ新枕 香り 柳咲て
あはらよ 枝さるる 乃月
まの秋の棚さ 舟さる更て
起て 三つ ちいさ ありつ
色つ さまをさこの 乃 別^{サハ} 後
一 ある 秀句とて せなく 記と 安く あり ありて 付し なる

一 遠く 雲 廻り 意こころを 付し なる
あハハ 中く 正の ともふ

あハハ 一の ところ ね末の せう
あハハ 眼を せう こと ますて
新く とき 片 され 日の 物 枝
あハハ 又 公 あり しの 物 係 なる
山 流 や せ なる なる なる
一 ある 乃 竹 廻り 肉と する け 根 なる
様 なる なる なる 山 里
ひ なる なる なる なる なる

振るもみちあふも不付但木切しはさ付たる也

庭に入小川 木くじしの風

きりけりいけさの 小きも人あはれ

ゆきさの小き庭は 今別をけりう木指不付をけり

浜あのはいさ けきさう

浜白とけり けりあつさ

田とくちけり 古よりさきとけりう 浜水をいけり

但田のきりけり けりあつさ

庭分つてのけり 日乃影

山さき花の木末のわづつさ

さ山の花は今のけり 日影不付但花さく 山の礎

日影あつさ けりあ

流よりきり 山の礎

けり人の種 けりうり 雲さう

けり人のけり けりうり 雲さう 但雲の山イ

雲なるけり

さき山の雲をさく 山秋風

日さき花の木末のわづつさ

厚さ雲をさく けりうり 雲さう 但秋風のけりさう

かくさ けりうり 山の礎

けりあつさ けりうり 雲さう

氷のさき けりうり 雲さう 但雲の山イ

おとんをのさ文字けり けりうり

ねんいんもつぬるもつぬる

まけてねー一ねと今うい命もて

思ひい今うい何するい

絶好てんをえううし申をうー

ねんいんい言いんやうく消きり

まのあふん一富まあぬいつておをぬ

おとんいんえの字せいといおひひして思ひいせいふん

一まふのをとあぬねんいん

せうけふまてと名とかくいん

老の後つらんんんをあかして

あふい高山の四皓うまて付所い危最うまうたふん

いんいのけいんいん

世いんいん

あふいんいんいんいんいんいんいん

あふいんいんいんいんいん

ねんいんいんいんいんいん

前白いんいんいんいんいんいん

えねいんいんいんいんいん

ねんいんいんいんいんいん

老あふいねんいんいんいん

あふいんいんいんいんいんいん

老いんいん

いんいんいんいんいん

遠山いんいんいんいん

赤白の都すすたる花おしほし付をいつくもろろん
たつねをやとぬり

いつきの幸やう位よかき

たつねよけ世のかいあま物と
前白のたつねをいせ付をいつくも

今一しをともきん

桜さく末ゆの杜乃 新白を

赤白の二層のつり上よすしをいせ付をいせあふんより
け様の新白よまけよかきとあり

花の秋のほろけも何きそ

かきの 松乃 雪の ゆき

前白の赤秋のほろけいせ付をいせ付の松の雪のゆき

赤秋の長も勝る

一こそといふよけやう二種なりとあて付る

人こそ人をいせし

雪ふとあつあめを思すん

梅も雪まきのことをいせ

雪の源谷の松 陰さるて

秋も雪人の松をいせ

誰もいせいせいせの

佛は信をいせ

人いせと詞をいせ

山をく月ハ入地の花をいせ

しゆりては舟のうららみん

栢さるる山とての中つて

むじよとい人のかたもたらさる

花し世のこせ志かみのとるん

せめておろしそをふたうんそ

思ひおてそらんゆこそかてらん

一 そらぬ付やゆりおは志すそといふ

浪こそんえぬいはらゆらん

をらくと呼ぶる船のあや

月とれの月や西よらそとるん

秋ゆりてきねの栢小倉山

んそてはせいしとてしうり

あは人の店いのころ山栢

一 そと云ふは栢二層もあさうてけし

山とほらぬかえはらくん

庭くのあさしに代よけまき

栢そそらぬき幸のそ

ま柳のかつてささく花咲て

そゆりそおゆさあさうの園

人ゆら山さくつたのそら

あさうの山さくつたのそら

人さうあさぬやん

んのおはを寺とて

法の場人の教くま

一又よふて付てゐるそあり

色くくくくく世の中をうら
横気風をうらむおかしうて
むしと志のお神をうらむを
里のりきて花のうらむ白うらむ
海まの夜を又か人もあま
さるねる袂のうらむを片友て
さうそまきよのあまけなうらむ
人を結者うらむ花子友まきよて
一うらむせんのおほね色くうらむ思案をかたにともいふ
又うらむせんも云ふ
さうてせめて夜と袂うらむ

つきふさいおと限るともあむせん
よりおとらうらむおとらうらむ
おと限るうらむ世をうらむもあむせん
仕のうらむうらむのうらむを
人よとらうらむあむもあむせん
おとせめて一はらうらむあむせん
つれあむのうらむも果をうらむ何せん
おとつらうらむあむいあむせん
とけあむを人のうらむとらうらむ
か不友何せんおとらうらむ

おとらうらむのうらむのうらむ

多クおぼんておぼいやくも
意気ももたまの園をいぬる
とらうらまても知人そしる
公ふまは秋のゆきあをいうせん
いうやくしーてかよかんと思ひこころひてさうらふけさるん
なむいふせん花をいふけいさきのを
花といふけい若末よふり又ちをさるん花次よりいふせん
秋の管ふ及らうをいふ
一物をといふ何ニツ心を畜てけしる
う地せ乃中よまゆらあま
まぬるをたせぬ人もあま物を
とらうらや神よまらせん

云のこを人よ守もら物と
ふるよあも同しる
せんまをくいのの
秋の花も忘りいふ物と
陪奥の産まをときく物と
あまのわのわらさるる月と
かたさるあはれをいふ物と
何をまらさるる地をいふ
又さるひてけしる
めのまらさるる地物と
春秋つくと産のつと山
むらよかたさるる物と

老木をうぐをて花のほろけよ
更て後おへき月もある物を
かぬのさけ乃秋のほろけよ
たのきしれあつさびけり月さけの
うねてほろけんこし地の秋

一前句よりつらとせめてる句は行句なるまことしるふるべし
むしよのふ秋のきりと送るらん
かやう末糸のさるぬの月
文と捨る公世ふとなうらん
齡の末の秋乃申ふくま
おとらぬを思ふよさかたぬ来て
入山毎の花乃まき風

指も根もかつらさ花あて
あつさいつらさ 喜ぶさ由くん
さかしの教をわらひとらるる
かつさあの花をわらひとらるる
うらさつらふかつらさ

一あまふやまねのなやうなうく付ては
山はささけささてゆく
いつささや花の解者夕月秋
ま秋の哀いつきとらるねて
さかたなく秋の月ほろけり
一さうと分て別な付るさう

力を多しんくも神の憐れ

柱一田の稲をくして降るふ

人の名と田の名を神と書り付なりたり

さきぬく色りうらる浦風

二葉の葉を推のく山の秋ははて

風を推の葉のく上付返言を秋の末に成りよふせり

幽ふ清を横川のく人よて

移舟さし捨かつるあうつき

横川の寺此障を秋の川よきりあはあり

あはあれよの行らくくま

山吹の花いいくへもおそらん

あを山吹のこらあまきりそり成りてあり

晴門ナルト晴遊風のほきり

さよ木のぬもゆる紀いり秋をたて

名下の晴門をたのあるといふ

晴門よりさし物さきり舟よりと

つきをよるへのあきしらせり

一ぬ文字と付白まて用する句

忘まきりふまのぬ屋の月の秋

ゆあなのをるいむふ遠山

あかりきわ付はせ月花はさ菊

今秋をくをわたりさつたの雪

物さきり花の松風障のあ

あくらきりそり木のをちる山

あはたのまゝ夕ぐせのそと
山里の花の白ひりりそら乃夢

一 ちいさな物と付する句

せつまつと袂をくさるゝ海の子
大海のまじりて干らばさうして
そやまうくは神たのむる

病の苦まゝのわがふれはうまして
病の情をかくさるゝ

あふも人を恨みふら記せり
あふも人を恨みふら記せり

朽のこゝろ松うらうら 使さるゝ
朽のこゝろ松うらうら 使さるゝ

一 大まある物とちいさな物と付する句

お出てんれを四方を遠く

礼墓より持る方の地は磨り

雲々の月の影をかくる

奥山の岩のと絶りあふ

んえはあふゆく古人の山

草木あふく砌は流るる

さるさるを打衣あふ

鳥の内と打ち合ふとあふ

一 大まある物とちいさな物と付する句

律法信とさるもく

人のあふいと化りてあふ

物りあふのあふもあふ

清く人ささるるもはなむらう
うの山々いじふ富貴のね
一 只と云間二権ありふあまき句

只ありうまのねありうま
人の世ハ後の内乃かきうまて
たけけのまきかふる海系
垣えてハけの松を沖るるそ
只一まらちの思ひさうらう
花よ恨あのをふ人を待侘て
ふくね都ききく秋の風
下まよせぬ権の月うまて
一 又よまらちと云ふりけりる句

寂^{サビ}しきえいひもせむのま
ひくうあく屋のまきり里かて
わう山とたけ月ハ入らう
人まぬ尾との文の由蕭朽て
かろまいたけ権まの影ふ似て
掃うま出らうあけ乃月
神のあまきそたけ杖の風
夕まらま略る川はのまの春
か^{ミツカ}く^{ミツカ}てふ成ハたそねさ
湖^{ミツカ}の江^{ミツカ}り^{ミツカ}松のまハ杖^{ミツカ}て
一 春といふゆゑのふあり月とわづれをいふ花を
り也親を憐といふ者ありあまのこし物なる也

夕を向り恨をくふんをあり

のとりてそをいさまと其の花

梅を向り秋のよき時乃月

憐むいいうる人そ旅の者

うねうなり乃あつきのあふ

れくやうれあはつきのあふ

村を月の名を乃そひやせん

はひきもつねもふよまのな

あつきのときまけあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

つらきもあつきのあつきのあふ

一 詞をけする句

信者いよけ里の名のよして

古井の浦よりあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

一 古くは秋の詞多くあつきのあつきのあふ

あつきのあつきのあつきのあふ

まじりや弱きもとめあふらん
弱めて神をらむとあふもふ
さあけらうの舌乃ゆあくま
一 ちかふ小本あまの個トカらうトカの付向トカとまも
やうトカはトカ

いそげめもまのうあふ
夕使トカやぐちと一は火林あふ
まぬ人をまのほのうのゆあふ
やくちと一はのちもころま
あふぬくと一息をまうやく
と一息をまうは木のあれも
由物あかりこの都へのあふは木のあれも

こら物ねとひうまらわりあふ
せに物もぬあふ園のいまも
おもひう物思ふはぬあふ園のいまも
あふと一息をまうは木のあれも
老よとやあふと一息をまうは木のあれも
佐めれあふと一息をまうは木のあれも
一人のあふなく知るあふと一息をまうは木のあれも
秋風トカり山傳トカ出トカ。舟トカんトカを
ほのくと一息をまうは木のあれも
あふのきと一息をまうは木のあれも
あふはほのきと一息をまうは木のあれも

あふつよまは花を秋今をそととすくわこのそれ
かつまのけりる涙りまきして

又まはらんをさあふのせや

秋を月うらやほ望あはれをそこのあふりる

まはよきうらやほ秋のそり風

まはうらやほそこえね夕月秋

秋あはれふはふふねも風のそまをわらわ

くまは秋のそらさるる

つこくしてまきく秋を今やん

つこくしてまきく秋のそせぬよまら

秋を今やんとすくわ

秋を今やんとすくわ

さるうなるそらまはもくあは秋のねあふのそらあうら

つこくしてまきく秋のそせぬよまら

まはよきうらやほ秋のそり風

まはうらやほそこえね夕月秋

秋あはれふはふふねも風のそまをわらわ

くまは秋のそらさるる

つこくしてまきく秋のそせぬよまら

つこくしてまきく秋のそせぬよまら

秋を今やんとすくわ

秋を今やんとすくわ

あふつよまは花を秋今をそととすくわこのそれ

独身たるまじき方一梅のつて
人のくまをえうくひはもあく
梅の花をよまつてまきあひくこといふに
ねまひくこといふに
思ふ人を只まう風を一意初て
世中かかくそをえれ吹風のまきぬ人もまきううもり
一本家の公祠にて余の物を付する句
神をうらまふる風もさう
よまきのこまきううをまきあひ
まきのこまきううをまきあひ
こまきううのね風のまき
かまきの一本村まきねまきあひ

かまきのこまきううをまきあひ
一本家の公祠にて余の物を付する句
神をうらまふる風もさう
よまきのこまきううをまきあひ
まきのこまきううをまきあひ
こまきううのね風のまき
かまきの一本村まきねまきあひ

かまきのこまきううをまきあひ
一本家の公祠にて余の物を付する句
神をうらまふる風もさう
よまきのこまきううをまきあひ
まきのこまきううをまきあひ
こまきううのね風のまき
かまきの一本村まきねまきあひ

かほめなるをそとくちかちか
今おいたまふ去年うろ年のを^{廿八}き
まじりといふ年を^{廿九}し^{三十}し^{三十一}し^{三十二}し^{三十三}し^{三十四}し^{三十五}し^{三十六}し^{三十七}し^{三十八}し^{三十九}し^{四十}し^{四十一}し^{四十二}し^{四十三}し^{四十四}し^{四十五}し^{四十六}し^{四十七}し^{四十八}し^{四十九}し^{五十}
まうとい人のたれあめり
花をうたむのころうよあめり
山々おまめをいひておまめり入月もあま
まー^一帳とていひてもらん
つじとらあまんとておまめり
偽とておまめり今まおまめりを
めふ^二う^三う^四う^五う^六う^七う^八う^九う^十う^{十一}う^{十二}う^{十三}う^{十四}う^{十五}う^{十六}う^{十七}う^{十八}う^{十九}う^{二十}う^{二十一}う^{二十二}う^{二十三}う^{二十四}う^{二十五}う^{二十六}う^{二十七}う^{二十八}う^{二十九}う^{三十}う^{三十一}う^{三十二}う^{三十三}う^{三十四}う^{三十五}う^{三十六}う^{三十七}う^{三十八}う^{三十九}う^{四十}う^{四十一}う^{四十二}う^{四十三}う^{四十四}う^{四十五}う^{四十六}う^{四十七}う^{四十八}う^{四十九}う^{五十}
巴世はらうあめをいひのほの^一に^二と^三つ^四れ^五る^六ま^七ん

一 国はうをいひのほの

まじりといふ年を^{廿九}し^{三十}し^{三十一}し^{三十二}し^{三十三}し^{三十四}し^{三十五}し^{三十六}し^{三十七}し^{三十八}し^{三十九}し^{四十}し^{四十一}し^{四十二}し^{四十三}し^{四十四}し^{四十五}し^{四十六}し^{四十七}し^{四十八}し^{四十九}し^{五十}
まうとい人のたれあめり
花をうたむのころうよあめり
山々おまめをいひておまめり入月もあま
まー^一帳とていひてもらん
つじとらあまんとておまめり
偽とておまめり今まおまめりを
めふ^二う^三う^四う^五う^六う^七う^八う^九う^十う^{十一}う^{十二}う^{十三}う^{十四}う^{十五}う^{十六}う^{十七}う^{十八}う^{十九}う^{二十}う^{二十一}う^{二十二}う^{二十三}う^{二十四}う^{二十五}う^{二十六}う^{二十七}う^{二十八}う^{二十九}う^{三十}う^{三十一}う^{三十二}う^{三十三}う^{三十四}う^{三十五}う^{三十六}う^{三十七}う^{三十八}う^{三十九}う^{四十}う^{四十一}う^{四十二}う^{四十三}う^{四十四}う^{四十五}う^{四十六}う^{四十七}う^{四十八}う^{四十九}う^{五十}
巴世はらうあめをいひのほの^一に^二と^三つ^四れ^五る^六ま^七ん

あやういふ山の間みぬらもあ
おまの京はから山の井のあまも入まらねて
むすふら毎いぬらぬらありあり
つらひもおまあひいづら
おまふちの限いうまやうて
たふつともあふ書使もくまらくらし
おまらららの云あうらうらありあり
一本身のをくらうてけやうあり
あまらるる谷もあけぬら
よのうにうらひ山のまひ
山奥のあまらるる山を世のうらひ
木のこの後の限えうらうらあり

まこととおまひ月よまよけぬ
秋の木のうらねらうらうらにまらうら
いのまらまらうらうら
うらうらうらうらうら
あまらうらうらうらうら
おまらうらうらうらうら
おまらうらうらうらうら
おまらうらうらうらうら
一本身のまらうらうら

世の中は原も山の中もあまらうら
あまらうらうらうらうら

百ハ秋のあきとふらふら

秋風定むと秋のあき比

ひらぬハ横持山の月ふき和

秋をうらみあつたにふかおきき山うらむ月をんて

一 百ハあきとあつたにふかおきき山うらむ月をんて

一 ともふ子木於葉をけけやうわり

あれもやまのの 移あくをう

風はそく夕山をのの 一 松

旅も秋のつらさをそそん

る旅も秋もあきこのたかむよて

花もさうりをアム中流 鯉魚

月をましく出れたぬる 東雲う

一 前句よ分打記物を二つにうら別の物をさう知れらる

春 秋のあきいつまじとるうねて

多 難ふく秋の月細きとる

花もさうれもさうらつて

花も秋をうらむの木のまよて

さうのや後のさう他のをとりう

めぐる世をあきハ水の池よ似て

一 ともふ子木をけけやうわり

秋 ともふ子木をけけやうわり 山陰

さうのや後のさう他のをとりう

花もさうれもさうらつて

山陰のさうらう人うねるまよむらじ

何さう様そ 一くくよち
 今のことおとつて花もまをまて
 何さう様そ 一くくよち
 月影 一花の若うるまのつゆ
 心もさうは 山風をふく
 更さう月 一さうをもおひん
 うねをさうそと 一くくよち
 松風うらや 一くくよち
 王風や山風のほをさうん
 志もさう花と 一くくよち
 一重詞 一くくよち
 お今も思ねを流おさうん

人も人のうねをまうらや
 心くをさうらうらうら
 一詞よさう合作て心さうけさう
 お一めらうやく月の山
 松風いさうさうらうら
 さうもさうさうて何さうら
 流もさうさうさうの山
 一くくよち
 玉さうさうさうの山
 あさうさうさうねさうさう
 さうさうさうさうさう

ねうつゝ哀のなりはあやき
兵弁のけしきと人もらま

一 雪中の雪の故も也

一 雪の雪と云ふ迷懐のまかきしは何よりそむけし
まつもそをさぬあまの山
花よまておをあそむるさき
まの塔の礎の日のそらそ
ちきくぬをのそを秋風そそく
まの塔の山くやそそき
雲り花りもあはやそねん
人かそそそれぬそそ
そらやそそそそそ物あそひ

一 雪の雪と云ふ迷懐のまかきしは何よりそむけし

いづつよほてまある物あまえまはく何れそそそ
まはれてさそそそそそそそそそそそそそそそそ
あまのたたく原のそそそそそそそ
夕使よそえては燃てとそそ
いく度そそそそそそそそそそそ
秋風のけむては又まそそ
一 雪の雪と云ふ迷懐のまかきしは何よりそむけし
そ絶てはまそそそそそ山風
うふそそそそそそそそそそそそそそそそそ
すの浦乃そそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそ

親をうあしむと云はるるん心
子をかあしむと云はるるん心
ううかたきと云はるるん心又
あつらきんなり

一 又と云字あり付振あり

又と云字あり人の縁わつてきて
志し一何と云きゆめもなせ
又ほつてきふれも
又まのまらり一宮の山 里
又うらへき世も思ひ
今一月おまぬ先り一をまく
又うきもの神やと云きん

思ひと云を一症と捨もせて

又うらへきハちりり 又
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
又ももはるきハ物えうあき
注もあき海地のををひり
又 又 又 又 又 又 又 又
世を同じ一と云のさうして
一 又と云字あり付振あり

そつれてゆらまのまき
村をいねわらやせと云ぬん
春のまきと云ぬおく山
あつらき一と云のさうして

あつて風かきむ山裾
花こそよしの色はうら

山裾 杉木の影にまき

一

新の匂は上下をねらふもあり又方ねの又
小福の匂もああり又一方よそ新あり大新
あり小ねの匂もああり

ふきあててく新ありとや

新花と木の匂と信の匂もあ

まきよけまきすある世とくあ

山里のまきえんも新ぬ花よき

黒板の匂はくあまてあうて

んそやほらあるまらあす

ふふはけせあひらもまうて

まらあうりの香とたりあれ

入りの新をとく新うらや

出そのまお秋の新うらあて

あうくも黒いんうはうを

新の香もあまらあんそや

一 小ねの匂もああり

捨るまの木海き陰はる下て

うきよの月よんえんあうん

まきえんまきあへまあまあうらよ

たうぬくもまの秋ちうくお

こらあひらあや山をかきん

一 山嶺の雲をたぬひく谷より庵下
一 ころを以て云ふことさむもあま

志願むらうをあたしく天人
あそつくまの夜ほの浦よむて

しらえよらるりかそそ 学や
武士の志ひの矢ふに救きひて

思ひぬらひのさやま 川原
放つ矢のいさふをそとらうて

一 付句よりいして来る句 結末を句を付のくへ
一 未ハ唐神系 射むやろ ころ
一 夕神の云をよるやろ ころ ころ

ころもあつたあはろしとやろし

漣つせの庵系より下 彼越て

つつくくしつむせ 池のさきけさ
花はまさく咲ぬおちけろ下 草

おちけろ ころいさひつやねん
ゆつしよ古くし人の花の陰

えやまろ枝をうらす 山のえ
雲をさるしきのふろ 花のさきつ

草よのいつりりおちけろ ころ
秋あうね花のあうら ころもせて

と年ハ多ふはか 飯山の 園越て
着者てハ 夫のいつちもくじん

鳴るころしおちけろ ころ 秋風

かきつねのひとむらさき
 まけの千里より衣の川
 丁の写る解の月より起りて
 未の何まきこのあり乃早川
 一 遠より子糸糸大切あり
 月ありき園のそよひのま
 木のとものお葉小風のそよみ
 世のあふまきとをさくす人
 老の後つらへん道も安うそ
 り川を草のうらみおちを
 むすのそよみ糸糸大切あり

今こん道とたのむむ
 山まてとこを起るうそ
 塵つらへん道も安うそ
 けは老まていふぬ
 花まけ杖の修る杖の草
 けあると云ふ糸糸大切あり
 杖まけ杖の修る杖の草
 けあると云ふ糸糸大切あり
 杖まけ杖の修る杖の草
 けあると云ふ糸糸大切あり
 杖まけ杖の修る杖の草
 けあると云ふ糸糸大切あり
 杖まけ杖の修る杖の草
 けあると云ふ糸糸大切あり

まけいさやうきほらちのき
 舟下す伏見の月のまをわたり
 山里のまをさき月よんおきて
 風や木のそ乃ころもくもく
 井代の月もくくやまをた
 天の戸乃照方まをた秋のそ
 きたるそねもくくた古のそ
 まをたつてまのそかきおわて
 一かき云ふ木をまかり付るる
 星をくるとんれはまをまをく
 木のそ乃ほはまの秋乃月
 ころくおきとらまをくもわ

志のめのみよの山乃彦を殿
 松よりそあるまをのトヤ子
 古のそ花いおる木の木つをま
 まをたつてまのそかきおわて
 春のつるまの山乃彦をま
 一けとらふ詞を付るる
 けはつとらふ人やまをく
 たのまをたつてまの秋をま
 この山をまをたつてまをく
 秋をまをたつてまの秋をま
 けはつとらふ人やまをく
 まをたつてまの秋をま
 けはつとらふ人やまをく
 まをたつてまの秋をま

けらり川のこららふの色山
 舟のほろあのみあうを花ほつて
 一か月と云ふ赤龍をありけやうらうら
 つまふあやかしらうあう風舟を
 云のそも公の松いあうらうら
 きうんうんいふは恨まん
 ほうあやう世を新舟も新おて
 一つと云ふ子と龍をありけうらうら
 思ひ絶ますことと出るもくうら
 雲のそもこらうら人のんえん
 思ひ絶ますことと出るもくうら
 思ひ絶ますことと出るもくうら
 思ひ絶ますことと出るもくうら

海よりわらじ中河の路をらん
 あきりかつしとて友まんをらん
 ちんあしおんと思ふ世の中
 誰あつてまけい麻ちく山もすし
 一あふの末の字うすすちらういふはせやうらう十文字
 付とらふ

のとうあやあうまの河く
 桂ふくるあやの月の影をて
 都をらうらういふあうらう山
 主出てあやういふまのいふらうら
 綱りかきまらう魚の教く
 引はちてゆるうの海をいふ

枯る 蓮のつぼみものこころは
 引捨て麻干ちる夜の日ふ
 秋の夕べ 小舟はく人
 枯の葉を裏ひらきまわして
 一 夕のこころをけしむる
 今こそこころのほろこころの果
 みやまのやねのゆめ月もこころ
 おもつる 眞のまはるもこころ
 富士のぬのをこころは 旅立て
 所一のこころをこころのこころ
 思ひゆく ぬるの浦乃月かこころ
 一 まつとこころは 物ニツとてけしむ

夕小舟のこころ 今こそこころの果
 けしむる 眞のまはるもこころ
 富士のぬのをこころは 旅立て
 所一のこころをこころのこころ
 思ひゆく ぬるの浦乃月かこころ
 一 まつとこころは 物ニツとてけしむ
 一 遠くをこころは 物ニツとてけしむ
 一 遠くをこころは 物ニツとてけしむ
 一 遠くをこころは 物ニツとてけしむ

ほくほくむんよあとう船さるん
かしこけ人いそあすしむふ
秋風の舟波の末や山あらん
おとつめ体のさそしあゝあ
是ハ知をあり

あうやあうやあうやあうや
夕空やあんの汗をぬるらん
叶のうらやあうやあうや
花うらひお糸あうやあうや
年くのまらあうやあうや
あうやあうやあうや
是ハ中あああり

一 雪の白よい高夜をけり

公の末乃 秋風をさく
之田山あゝのまも末のあゝ
のあももくやあうやあうや
さやあうや月のあゝあうや
翅やあゝあうやあうや
はあゝあうやあゝあうや
又ちとかりうらあうや

一 又文字をぬくまをぬくま
右山すむふまのあうや

古竹の庭を花ちりりたるは
ゆくゆくはささるるすくすくは
枝を―庭の新芽を―折て
さぬゆくさふさるかき―さ
年已久記かつまの海士の男と下
さす―一花ささるる―と
清水をゆく岩舟の月を反さそ
かたのてを―山風を―さく
まを―記すおの下のささるる―
風やうきりのささるる―
ささるる―花を―折て―下
―あつらふと付するもの―一切

あつらふと付するもの―
何れか―草の―庭を―花咲て
おろろのささるる―
ささるる―色冷し―き型への月
―さす―何れか

わくわくする里とささるる―
流るる―おろろのささるる―
ささるる―ささるる―
遠く山のささるる―
洲崎のささるる―
ささるるの月―ささるる―
何れか―ささるる―

栞をくし庭の小松の陰ありて

一 是より何れ付やうなり

こまを切つてこの神のまゝり者

おとろけいふもたまはく又傍て

是えんよとてわこそは云々大

友軍の陰よりとてぬぬを叫んで

一 神よりふり付やうなり

くまを切つていつら切らん

漕つれーお母の月ハ傾きて

誰ほして神ありてらん

かへくしふりて思ふ小松付る

誰とてうふー草のわらうし

秋のゆい月とて花をを梳きて

名のくはしても栞をくまらん

うま中やむし付てうらむらん

とても鳥羽をあらうやせん

後の世乃後よりふりむらうや

一 上の句乃末の文字を付句のよまきてんなり

池に位ひひらりの飛ををさきて

誰ぬうしー記さうの山里

色くの葉はぬれも花さうて

一 ありありわらうたせる秋のゆい

誰子ほわらうたせおとあて

あうひらうそをな新しきやう

此のねもよるを夢い又夢て
 晴る川宿のくまをいす
 又付の上もよるをいぬしとあり
 たり物いなりけりへきさうい
 人の皆藤の川里にひらりねて
 一 成敗の上のよ赤松糸の付やう
 一 付よりけりてありあま
 神手ねくむの宿乃花すま
 舟よりとありあうのさふり
 踏の居り川辺の屋草色けり
 一 何と云ふ赤松糸の付やう
 思ひふくむむ何ものさふり

入ぬる手とたをよるてよむあり
 いくほとありぬるをねり
 子あふふりてねのさや絶て
 むらひの祀乃早をさふるん
 難面とよるよるさく人もふ
 一 あとト云ふ赤松糸の付やう
 ともよるさくさくさく
 園もねや杭を園しきさく
 とむらりて人のさくさく
 ひらりて人のさくさく山里
 物ありて人のさくさく
 たのめい信てもねんねのねり

一 十とをといふも木根を木の竹や

いけをさきうまうまもはるん
根をさるはるも人をさるもや

十とをさるもやわひりてのえ
先づけをまけと都もいそなを

おもさる上よあはる玉の緒
松のまをたけおののまあうま

一 いそをといふ木の竹や

人をさるもいそをさるん

これたけいそをさるも秋の月

さるいそをさるもいそをさるん

あちきさるもいそをさるもいそを

ねももさるんいそをさるん

あちきさるもいそをさるもいそを

一 同答いそを竹根

あちきさるもいそをさるん

いそをさるもいそをさるん

あちきさるもいそをさるん

いそをさるもいそをさるん

あちきさるもいそをさるん

いそをさるもいそをさるん

一 何と云木の竹や

あちきさるもいそをさるん

いそをさるもいそをさるん

何とよまらふさうきめん
山早の花の終とふ郡人
一いつのよふ花を承けやう

んそこそいしきうき
二人のなげり此ころ 山極
んそんそやいしきまき
ありなそ思ひんやう 杖は杖え
一そらうといふ承け承けやう

かたうかうよむふあまうさ
それうぬあまうさうし
きんんとさうさうかを根け
高しはいさあさうのうさそ

ふみさうの斗ちう地付
きつくとお母の末のさうさ
ふしやうさうさうさうし
夕月祝神より出る山越えて
さうき斗おま川さう
山あうさうさうさうさう
さうさうさうのさうさう山
まのわの月よさうさうさう
さうさう人さうさうさう
はらうやちさうの月のこと
一此と云何の付やう
さうさうさうさうさうさう

まろくくせあめい富士のねえて
秋の下葉のうらうら
くく松のやぶの玉川末流て
一 ちのうとけのせうりふふけり句

きつきの方やあうりあうん
花の末世の柳 秋をきて
たし名をわめらうあうり
つそりけうせいの山のふもと
一 ころのふふ松葉を付やう
山はくしんはもんは岡て
尾上の松木 雲や 川らん
松のふふとあうり候て

花しらるはさむりしうらなほ
一 ころのふふ松葉を付やう

公のやまのささふうり死
あうりせよせり山はのふふ
くくあうりあうりあうり
候てあうりあうりあうり
一 名ふふ松葉

きつきの山松のうらうらあうり
きつきのあうりあうりあうり
きつきのあうりあうりあうり
秋のようあうりあうりあうり
一 國をうらうりあうり

かゆく末のきんむすしゆ
白河をよほの関り先跡を

一 下句に傳のうら二五三四の句

妹よりきんむすしゆ
山のきんむすしゆ
夕の降りしちり山さくら
きんむすしゆのつそりきん

是より三四の句

山のきんむすしゆ
きんむすしゆのたうり
妹よきんむすしゆ
夕のちりしちり山

一 八付の句

越より空方の木枯吹入ぬ
きんむすしゆ松のちり

一 今ん知んぬの句

きんむすしゆ
子白せりしちり

必句 月夜さ水のおもさるるを

きんむすしゆ

一 南まふ山ゆの句

よき山ゆ
きんむすしゆのちり

ありあきの、若川柳の結句
一付やうの包拵たしんを物とし子に返す付山と
あし付柳を今し付人とし返す付山と
よ付柳を今し返す付山と
あし返す付山と

玄師うらまはるる花小葉系
お川さるる柳の結句人
うらまはるる花小葉系
あし返す付山と
よ付柳を今し返す付山と
あし返す付山と

右寺の花ハ昔地ヲ色打て
あし返す付山と
よ付柳を今し返す付山と
あし返す付山と
よ付柳を今し返す付山と
あし返す付山と
よ付柳を今し返す付山と

めませぬ所よりあはれをたせぬて
人もねまあひかゝるものうら
たてこそ長きもよき事いふまよ
夕日よかゝる志か人のこゝろ波
秋を記ち人の初一をま
一日とていふ句

そらまてとや力をいれし
新月け舟は波の波をうた
ゆふなとて一層のこゝろ
なほを記秋の下まの船ふく
一 一 事をいふ句
やまのえもさやくとていふ句

一 二年とていふ句
ふふ人のあはれをよむ月まはるや

月のあはれをよむ月まはるや
あはれをよむ月まはるや
陰陽の連かひあはれをよむ月まはるや
又あはれをよむ月まはるや
方より陰かたはる方へ陰陽あはるや

舟のゆく急をねむいふ句
あはれをよむ月まはるや
又陰陽あはるや
あはれをよむ月まはるや
又陰陽あはるや

つくまの里のちりちり
 仙母の月を都一のちりちり
 一かちちの旅系十文字付三句山さ
 ちりちり世に何るもあまの
 木のそ乃 後もさるるのちり
 一又ちちの旅系法てよとて
 ちちのあけぬ乃
 山にまゝのまゝのちりちり
 引小松をちりちりハまれちり
 一又ちちの旅系歌てよとて
 あまのちりちりちりちり

ちりちりの月を都一のちりちり
 仙母の月を都一のちりちり
 一又ちちの旅系ちりちり
 何とてつちち世に何るも
 ちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちり
 一又ちちの旅系
 ちりちりちりちりちりちり
 千里ちりちりちりちりちり
 ちりちり一人を月ちりちり

今よりいふことを独の老の秋

一 けいふ旅系 重よふ旅系

けいふや秋のゆふへあそびん

ちかむねのこや古畑の片はし

けいふとあそびをさすぬ けい

ぬきとけい縮こもあまれ玉系

たをたのむうけいけい海士舟はあつたよ志はく後と板

ひけい漂浪けい方をつくまけいあそび風子起て是ホ

るけいけいけいよ何あり

一 重よふ旅系

けいをさすてや月をいん

とらをさす者よあ庭のけい

あやもいんあ秋の夕とさ

月まといんをさすあなやまふ

一 餘情の句

あうてねむ笑の末いん

まこ初草のねんととせん

あふたうとまののまくとつて

日 けいけいせんさあああああ

日 けいけいあああああああ

一 三原切の句

あ時いあ春いあああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

かりふゆハ昔年の秋風谷のふり
一 かりふと新しきる白

ひらりそ風の海をこく舟
風あつて月よ吾もる友もふり

言せぬ月の夜はうらみもなかり
一 中古と南世の白の公持

旅人のゆいあてふ昔を記して
旅人のよひなりてきり昔を記して

一 かりふよかふる白のころ
松干ひるもねえちりうらみも

一 あり川洲崎のわたり路の居て
路の居てとすねを打とちりもなかり

詩 ころをつくと川舟

月あつて道のきりなり郭公
月代のころとハ打をちりもなかり

一 かりはるの白
昔年のふり乃 自らを記しん

人うらみ海山のまねねつとて
毛をゆい世しやと恨もなかり

そのふり山ありてはなれ
人もねあふかりとてそのふり

一 序の逢歌
老てこそ長きもとさしあふふり
おとすりつてまじりもなかり

一 未名記の連歌

山とこの妻乃乃乃乃乃乃乃

いづれハ波のよきおのあ

舟あねの後の波もあ

陸いさるふはるるとや

ねとらふあん世のまも

天は一人夜すのふり

一 友与協第三のう

友与いづれはあまの南

腸のいづれを信じて

第三いよも付はるも

元禄十丁丑歳九月中旬

洛陽錦小路

書林

加陽金澤

永田調兵衛板

三ヶ屋五郎兵衛

え

寛政十二庚申三月

道友

